

文=五月女善重  
(五月女総合プロダクト)

## お坊ちゃん、目覚める

大学を卒業し、父親が経営するパチンコ店で働き始めた僕は、「どうやってこの世界から逃げ出そう?」と、そればかり考えていました。平成になったばかりの当時、パチンコ店は「ガラが悪くて当たり前」の環境だったのです。

お客様に呼び付けられてさんざん文句を言われ、しまいには「なんで出ねえんだよ」と、煙草の煙をフウツと吹き掛けられる。喫煙の習慣がない僕にはそれだけでも苦痛でした。

『なぜ、顔めがけて煙を吐かれたり、文

句を言われたりしながらも、僕は玉箱を運んでいるんだろう?』

ほんやり考えていると、島の中で、お客様と従業員の取っ組み合いが始まります。

『ケンカだ! 止めに入らなきゃ』  
仲裁に入ろうとすると、上司が

「サオトメくんはいいいから!」

と、僕を羽交い絞めにします。経営者の息子を危険な目に遭わせないよう、上司は頑張ってくれたのですが、単なる傍観者である事実には、自分が必要とされぬ虚しさを感じたものです。

僕は、資格を取って別の業種に就くことを本気で考えました。さまざまな国家資格の本などを取り寄せては、遠い世界に輝かしい未来を描いていたのです。

そんな毎日が続いたある日、ふと一編の詩に触れました。カール・ブッセというドイツ詩人の作品です。

「山のあなた」

山のあなたの空遠く 幸い住むと人のいう

ああ、われ人ととめゆきて、涙さしくみかえりきぬ

山のあなたになお遠く 幸い住むとひとの言う

(上田敏訳)

「山の向こうに幸福を探しに行つたが見つからず、涙ぐみ帰つてきた。どこかに幸せはあるかしら」という内容です。

解釈は人それぞれ違うのですが、このやさしい言葉の行間に、

僕はハツと息を呑みました。『遠くに行つたところで

環境を変えることが出来ますか? 幸せは案外、近くにあるものですよ』と、

静かに教えられた気がしたのです。

起業者の多くは裸一貫



さおとめ・よししげ

五月女総合プロダクト株式会社代表取締役社長。大学卒業後、父親の営む建築資材会社を経て、26歳でホール業界に。釘調整など現場仕事を経験する中で「自分の代になる」という強い意思のもと2000年に屋号をライブガーデンに変更、2003年代表取締役就任。「スタッフが主役の会社づくり」を掲げ、栃木県南部を中核に現在8店舗を経営。1965年生まれ。

でスタートします。ベンチャー企業などは創業3年以内に7割が倒産するということですし、生き残っても給与遅配や過剰労働など、社員に負担を強いられることも多いと聞きます。

しかし僕には、創業から数十年経つ安定した会社の二代目という、恵まれた土壌がありました。生まれつきの幸運が近すぎて視界に入らなかつたのです。

『今まで自分が抱えていたのは、なんて贅沢な悩みだったのだろうか?』

業界を嫌だと思ふなら、好きになるように変えればよい。不平不満を言う前に、率先して改善すればいいではないか。

「僕は、それができる立場にある!」

と、やっと気付いたのです。

どんな業種に身を置いても、経営者である以上、必ず何らかの壁に直面します。だからこそ問題を解決し、現状を打破したときの喜びはひとしおなのでしょう。

「自分の代になる」という強い覚悟に目覚めた出来事でした。

▲